

良い時に出荷出来る有利な点がある。その上日本の大市場である京浜、中京地区への交通条件が良く、輸送圏芸に最適地となっている。これらの好条件がそろい、戦後急速に養蚕や雑穀栽培から蔬菜や果樹栽培にかわり、畑作農業に大きな比重を占める様になった。しかし桔梗が原では明治末から原料用ぶどうのコンコード栽培が行なわれこの地域の果樹栽培の先駆となった。果樹の価格変動や、くずぶどうの処理に対処するため醸造業もあわせて発展したので、ぶどう栽培は着実に台地の畑作農業の中に浸透していった。甲州ぶどうとは出荷期の違う寒地性のぶどう栽培であるので競争に耐えることが出来た。最近では市場の要求と農業収入を高めるために生食用ぶどうの栽培が中心になる傾向が見られる。

盆地南部では地域によって果樹と蔬菜栽培が畑作農業に占める割合が違ふ。そこで果樹栽培による地域区分と、畑作全体による地域区分を行なった。果樹と蔬菜の分布状況の差異は自然条件ではなく社会的条件により生じたものである。両者の導入があまり行なわれない地域は自然条件の不利な場合である。

以上台地の多い盆地南部は、塩尻市が新産都市の指定を受け一部に工業の進出も見られたが、やはり畑作農業が最もこの地域を特徴付ける要素であり、東京や名古屋の市場と交通条件が良いため、果樹、蔬菜の栽培が有利に展開される。

大間々台地の地理学的考察

野 口 文 子

第一章 自然環境

第一節 概説……調査地域大間々台地は群馬県東南部、赤城山の南東部の裾野に続く扇型の全地域緩慢な傾斜をもった広い台地である。足尾山塊と赤城山との間に谷を作り南西流している渡良瀬川が、標高 220 m 附近の大間々町で山地より流れ出て、そこに砂礫を堆積してできたもので、標高 35 m 附近で利根川の沖積地に接している。

第二節 地形分類……(1)山地及び丘陵、(2)上位段丘面、(3)中段丘面、(4)下位段丘面、(5)台地面(木崎台地)、(6)沖積面、(7)谷床面と主にローム層の有無及び厚さを手がかりに、以上7つの地形面に分類した。問題点としては(5)台地面と(2)上位段丘面の新旧関係であったが、確定的な結論にまで至らなかった。

第二章 人文環境

第一節 概説……人文環境は大間々台地のほぼ中央部から南端にかけて位置する藪塚本町と新田町を中心に取り上げて考察した。

本調査地域の集落立地及び農業土地利用は、地形と水による制約が明瞭にあらわれている。標高約55mに存在する湧泉帯以北は地下水位10～15mという深井地帯で自然河川もなく、永い間原野のまま放置されていたが、17C後半の新田開発により初めて居住地化された所である。現在も当時の典型的な開拓路村としての形態の名残りとどめている。一方湧泉帯以南の地域は水利に恵まれ、早くから居住地化されていた。

第二節 農業……本調査地域の農業土地利用は湧泉以北畑作地帯、以南水田地帯と明瞭に区別できる。湧泉以北に位置する藪塚本町では、普通畑及び桑園を合わせると畑地が経営総耕地面積の91%強を占め、大部分の農家が水田を所有していない純畑作農家である。経営の中心は養蚕で、その他スイカ、ダイコン、甘藷、麦類、酪農が加わり多角的である。湧泉以南の水田地帯は古くから水稻を中心に、副業的傾向の強い養蚕が結びついた安定した形態をとっている。そこで、開田不能な地として近世まで放置されていたこの畑作地帯に、現在どのような農業経営がなされているかを、耕種農業、養蚕、酪農の面から水田地帯の経営と比較しながら考察した。

第三章 まとめ

最後に畑作農家と水田農家を農業所得の面で比較してみたが、一般的に畑作農家の方が水田農家より所得が低く、又水田農家はその耕作規模に応じてほぼ安定した所得をあげているのに対し、畑作農家は経営内容により所得水準が多種多様に渡っていた。これは同一地域内の畑作農業の中でも遅れた段階の農業と進んだ段階の農業が混在している為で、進んだ段階の農業へ発展する過渡期の状態であると思われる。